慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史の科學性の限界
Sub Title	Limits of historical study as a science
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.1 (1955. 4) ,p.59- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550400-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史の科學性の限界

神山四郎

序

近代史學がいわば科學的な歴史として確立したことは、ニーブール・ランケのいわゆる十九世紀ドイツ史學の嚴密な史料批判主義の成果の上に立つて始めていいうることであろう。この前提がなければ、ベルンハイムの史學發展の三段階（物語的歴史・實用的歴史・科學的歴史）というようなことは云えるはずがない。しかしまた反つてその科學性の要求の故に、現在歴史學の受けている試煉はきびしくもある。なぜなら近代史學の原則である「歴史的事實の客觀的記述」ということは、ヘルダーの "rein zu sehen, was da ist" 或いはランケの "bloss zeigen, wie es eigentlich gewesen" というような命題に集約されて、ドイツ歴史主義主張のいわば古典的命題を成しているが、今この命題のあらわす客觀性を直ちに科學的なものととれば、他の主張との間に多くの矛盾を生じてしまうからである。ドイツ歴史主義がその歴史記述において嚴密な客觀性を要求しながらも、その認識根據においては主觀的なロマンティク或いは觀念論思潮に多く

依存しなければならなかつた思想史的狀況というものを考えてみなければならない。(註1) まずヘルダーのこの命題自體がすでに、近代科學を育んで行つた啓蒙的な合理主義精神に對する反動的な契機から發せられたことを見逃してはならない。それは結果においては、主觀的なむしろ非科學的といつてよいドイツ・ロマンティクの歷史意識を生ぜしめて行つたのである。またランケの場合にしても、彼がどれほど史學の客觀的性格を强調しても、それは直接には政治的中立或いは道德的教訓からの解放以上の要求ではなく、Texkritikの操作の不偏性以上のものでなく、その歷史認識の根據——彼のいう史實に對する「滲透」——においてはむしろロマン的・敬虔主義的氣分、或いは觀念論特有の認識主觀主義に深くinspirierenされていたことも見誤つてはならない。このようなわけでドイツ史學の根柢にはむしろ近代化に逆行するような非合理的な衝動或いは認識主觀主義に傾く傾向がかなりの强さをもつている。それは史實史料の冷靜な操作にたずさわりながらもドイツ歷史家の胸のうち深く燃えている火であつた。學的といいながらプロシヤ官僚國家主義にもビスマルク理念にも乘じられる素地は充分にあつたわけである。しかも十九世紀のあの實のり豐かな歷史時代を現出したのは實にこの傾向であつた。また英・佛の思想界をつらぬく自然主義・實證主義の傾向がいきおい歷史の領域においては歷史學を自然科學と同一視しようとしたのに對して、その逸脫を强硬に指摘したのもドイツのこの歷史派の人たちであつた。(2) それならば、いつたい彼等にとつて歷史はいかなる意味で科學であるのか。十九世紀末から二十世紀初頭にかけてドロイゼン、ディルタイ、ヴィンデルバント、リッカート等がいづれも自然科學と決定的に對置してのみ歷史を「學」としようとしたのは何故であろうか。またランケやドロイゼンのような專門史家が歷史の原動力を追求して遂にはフンボルト・カント的な形而上學に拔けて行つたのは何故であるか。ディルタイ、リッカートが自然科學に對して精

神科學というものをつくらなければならなかつた理由はどこにあるのか。さらに現代最も科學的な歴史を主張するマルキシズムですら、その歴史主義のバック・ボーンをなす辨證法理論の故に反つて僞科學であるという非難を浴せかけられるのはいかなる理由によるのか。けだしこの問題は前世紀から引きつゞいて現代に至るまで追求されつゞけているテーマの一つである。歴史學の基礎ということはこのような問題性の次元から考えるのでなければならない。

一

最近主に英・米兩國でさかんに行われている新しい經驗論、いわゆる Analytic philosophy の中から「歴史」の問題を扱うものが出てきた。(3) これは兩國の思想史的傳統からいつて珍しいことである。と同時にこの見地から見られた「歴史哲學」という本の內容ががらりと變つてきた。從來歴史哲學を專ら唱導してきたドイツ・イタリアの傾向が歴史の理念(イデエ)中心の見方をしているのに對して、この傾向はそれを批判にかけつつ、歴史そのものの經驗科學的性格を分析するということに專ら關心を集中している。從つてここから自然科學の方法に對するヴィンデルバント・リッカート等の歴史の方法をめぐる問題が、再びより尖鋭な分析を伴つてもち出されて來たという感じがする。この問題は歴史學プロパーにとつても無關心たりえぬことである。ここではそのポジティヴィストのうちでも現在一番ラディカルな立場をとつているポッパー K. R. Popper の主張を手がかりにこの問題を若干考えてみたいと思う。

ポッパーはまず「歴史主義」Historicism(4) の方法を Anti-Naturalistic Claim と Pro-Naturalistic Claim とに分けて分析を始める。(5) まず前者の方、即ち歴史主義の科學性の消極的な面を見てみると次の點にそれを指摘している。

（一）「概括化」Generalization

科學の方法は個別的な觀察から出發して時間・空間を越えた general uniformity に達しなければならない。個物はそれの exemplification として見られる。つまり個物についての科學的知識は必ずこの general uniformity に對應するものでなければならない。然るに歴史的社會にはこのような long-run uniformity は求めうべくもない。なぜなら歴史社會は各時代・各地域に制約されるからである。この時代性・地域的特性を捨象してしまつては歴史的社會というものを成さない。故に結局 Historicism は long-term generalization はできないということになる。したがつて generalize されない個體を對象とするから、歴史主義は科學以前或いは非科學的方法といわなければならない。(6)

（二）「實驗」Experiment

科學の方法は同一條件の下に同一結果を得るためにどうしても實驗を必要とする。科學的眞理とは幾度もの實驗によつて得られた結果の齊一せるものでなければならない。然るに歴史的社會狀態は正確に同一條件を再現もできないし、その下に同一狀態を反覆させることもできない。故に歴史主義は非實驗的觀察であるといわなければならない。したがつてそこから科學的眞理を引出すことはできない。

（三）「新奇性」Novelty

物理界の「新しさ」というものは arrangement と combination の新しさだけであつて、その原理は共通要素に分析できる。これに對して歴史的世界の新しさというものはもつと本質內在的なもの、卽ち新しい factor の發

生としての新しさである。つまり intrinsic novelty である。故に歴史的社會は或る程度の分類・類比はできても、[7] 決定的な要素はユニックであるということになる。そのため歴史主義の方法は世界全體に formulary な一般法則を引出すことができないから、科學的方法としてはネガティーヴである。

(四)「複合性」Complexity

物理學は實驗的な isolation の方法によつて主題を單純化して扱うことができる。この主題の simplification ということは科學の主要な方法である。ところが社會現象は複合的な階層をもちながら相互に有機的關聯をもつて結びついているから個々に切り離すことができない。したがつて主題を單純化できない。そのため科學的に明晰な結論が出にくい。

(五)「豫言」Prediction

Physical science では一つの法則の明證が得られれば、それによつていついかなる處においても同一條件の下に同一結果が起りうることを確實に豫言できる。これも科學の主要な要件である。ところがこれに對して歴史主義は前述のように法則的眞理には達しえないから正確な無條件的な豫言ができない。

(六)「客觀性」Objectivity

物理學では觀察の嚴密な客觀性を保つために觀察者と觀察對象の間にエネルギーの交換があつてはならぬという原則がある。ところが社會科學では觀察者と對象の間に複雜な相互關係ができてしまう。その兩方とも人間であるから觀察者の意識が對象に作用する——したがつて豫言の內容にも影響してしまう——ので嚴密な客觀性が保てな

い。だから歴史主義に客觀的な知識は期待できない。

（七）「全體性」Holism (Universalistic manner)

物理學は constellation 即ち個の集合を考えるのみであつて、全體は atomistic な個に分解できる。これに反して社會科學は單に個の sum up 以上のものを扱わなければならない。つまり organic な組織をもつ一つの全體——social group (group-mind, group-spirit, group-tradition など)——を對象とする。そのため個の要素から全體が單に數量的に扱えないので、"society as a whole" は科學の對象になり得ない。(8)

（八）「直觀的理解」Intuitive understanding

物理學は純然たる quantitative term をつかつて causal explanation をするだけであるが、社會科學は qualitative term をつかつてさらに目的や意味も扱わなければならない。前者が inductive generalization を事とするのに對して、後者は特殊ケースの sympathetic imagination をしなければならない。(9) だからポッパーは「社會科學の方法は或る目的に向つての合理的・非合理的行爲の想像的な再構成」であるというのである。そのため social-aim や social-planning をも扱わなければならない歴史主義はいきおい科學性が稀薄になる。

（九）「本質論」Essentialism

自然科學の方法は根本的に nominalistic である。これに對して社會科學は methodological essentialism (realism) である。(10) 即ち歴史社會の諸事象について常にそれが何であるかという本質規定をしなければならない。これは科學的方法としては困難である。

大體以上であるが、こうなると歴史主義は自然科學に比べて殆んど科學性がないということになる。ポッパーはそのために「歴史主義の貧困」 The Poverty of Historicism というのであろう。同じ實證主義者が十九世紀には歴史を科學であるといい、二十世紀には科學でないというのも皮肉である。否、そもそも十九世紀の實證主義者は眞の實證をしたわけではない。實證主義精神というものをもつて從來の形而上學の組みかえをしたにすぎなかつたのである。コンドルセーやコントを見ればよく分ろう。しかしとにかくここに科學にならぬということの理由を綜合してみよう。歴史の對象が常に個に分解できない有機的全體（七）・（四）であること、そしてそこに生起する出來事が本質的にユニック（三）であるから、その認識が非實驗的（二）で、直觀的理解（八）に依らねばならぬということが出てくる。したがつてその方法が概括不能（一）でもあるし、予言不能（五）でもあることは當然である。だからここで問題なのは（七）と（三）である。他はそれから發する。そしてこの（七）と（三）の根柢において端的に物理的原理に還元できない世界というものを歴史主義の對象として考えてみなければならない。ではそれを何とするか。まず「人間社會」 human society と規定してみよう。この場合（七）或いは（四）の根柢を「生物學的な有機體」として規定することも考えられないではない。そしてそれはたしかに歴史の發生的方法 genetische Methode を主張する人たち――例えば K. Lamprecht, O. Spengler, A. Weber, A. Toynbee――の基礎でもある。だがそれは結局、發生→成長→老衰→死滅という一個の生物の生命法則をもつて概括化或いは類型化できるので――いわゆる「文化發生段階說」――（三）の意味をもつと徹底させようとすれば、更にそれを越えて非概括的・非類型的なものにまでもつて行かなければならない。それは結局一回限り性 Einmaligkeit[11] ということであろう。そうすれば、この人間社會に一度限り的な事がらをなさし

めるものは何であるかといえば、それは Um-welt から自らを解放する人間の自由なる行爲である。ではその自由をなさしめるものは何であるかといえば、それは精神である。こう考えるより他あるまい。だから結局、個に分解できない有機的全體を歴史的世界とし、自由なる精神活動（廣い意味での）を歴史的行爲とし、それの一回限り的な意味を追求するのが歴史である、ということになろう。そうすればこれは「歴史存在論」の結論に非常に近いものになる。更にこの人間的行爲の自由の本質を「理性」Vernunft と規定すればそのままイデアリストの結論にもなる。またドイツ古典史學の立場もインプリシットにはこの上に立つてきた。クローチェは人間的生と行動の源泉が精神であるからすべての歴史は「精神史」であるといい、ランケは歴史の決定的なモメントは世界史的關聯にあるからすべての歴史は「世界史」であるといつた。

だから貧困であるといつても physical science に比べてそう云えるだけであつて、歴史は本來自然科學とは對象がちがう、ということになればおのずから問題は別になる。だから歴史學の方法は自然科學の方法からは得られない。物理學的な意味で科學的といえばいうほど非歴史的になつてしまう。Naturalistic Claim を強いて通そうとすれば「歴史」を破壞してしまう。それが既に十九世紀自然主義者の陷つた錯誤であつたことはもう充分に批判されている。だからむしろウォルシュ W. H. Walsh のような幾分緩和されたポジティヴィストが「歴史は科學ではないが、さりとてextra-scientific な知識根據でもない」[12]と云つていることの含みを考えてみる必要がある。かつてディルタイが正統の歴史派の出であると公言しながら歴史學を自然科學とちがつた精神科學 Geisteswissenschaft というものにおいて基礎づけようとしたことをふり返つてみる必要がある。リッカートやハルトマンの歴史存在論がやはりこの方向に問題を解

決しようとしたことも充分な理由をもつていたわけである。

二

今、歴史學は全體世界における人間の自由なる行爲を對象とすると云つたが、それはもう一面において「過去における」という限定が始めからいわゆる per se についている。歴史が res gestae といわれる所以である。歴史は一度限りの過ぎ去つた行爲事實を現在非實驗的に本質直觀的に認識して再構成するわけである。だから generalization などの問題以前に既に個別的觀察自體が非常に困難なのである。(一) 過去の行爲事實、(二) それを經驗または觀察した記錄(史料)、(三) それを選擇・判別・結合した記述(歴史)。歴史的知識はこの三段の契機——クローチェが Chronik と Historie を嚴然と分けたのは炯眼である——を必然的に通過しなければならない。それは直接經驗が得られないで、しかも人間の主觀性を通過する折が二度もある。「歴史」はこれを逃れえない。しかもこの「過去の行爲事實そのもの」は現在消え失せている。今「ない」事實に對してあたえられた間接經驗または觀察記錄だけがのこる。それを通じて今ない過去の事實を推定するだけである。しかも同じ事實は嚴密には二度繰り返されない。したがつて實驗ができない。だからこのような事實性を物理學的方法で verify しようがない。Physical truth と historical truth とはおのづから違うわけである。歴史對象は根本的に事實と觀察者との相關關係をはなれては存しえない。從つて嚴密な客觀性はそもそも不可能である——(六)の證明。したがつてこの方法で過去の自由なる行爲事實を正確に具象的に表わすことは殆ん

どできない。ましてその行爲の內的動機に至つては不可能に近い。結局それはフンボルトのいう「豫感」ahnen, ランケの「追感」nach-ahnen, ヘルダーの「同感」sympathisieren, ディルタイの「共感」mit-fühlen といつたような認識者個人が全人的に——卽ち單に知性においてのみならず情感においても——對象と接觸して得られる體驗的認識によつて、いわば「理解」verstehen されるだけである。しかしそれとても相對的である。だがとにかくそれによつてとらえられた「意味」だけが他人に供される。そしてその意味關聯だけで歷史的世界が構成されるわけである。したがつてその際客觀的な手がかりはその意味關聯における論理的操作だけである。その際の眞僞の規準はその論理構造のうちにある。

そしてこの歷史の解釋も意味も、それはひとしく「現在」における一つの「立場」（或いは「觀點」）に立脚してなされる。したがつてこの「現在」の「立場」というものが歷史の認識には sine qua non の條件になつてくる。また史料の選擇・判別・結合といつた歷史記述の技術的操作においても、歷史家の現在の立場と彼のもつ選擇原理乃至は價値規準というものが必然的に條件の中に入つてくる。だから歷史は過去の事實の完全な復元であるとか、なんらの制限も條件もない過去の研究であるというようなことはもともと意味をなさない。だからウォルシュのように、歷史を *the* study of past ではなく *a* study of past とでもいえばよかろう。[13] 要するに歷史家の現在の觀點によつて歷史が構成されるわけであるから、極端にいえばクローチェのようにあらゆる歷史は「現代史」であるということもできる。しかし何れにせよそこには絕えず移り行く現在と立場の相違という「不定」のものが不可避的に入りこんでくる。だからヘーゲルが歷史家は時代の子であり、己れの觀念の範疇を通してのみ歷史を見る、と云つたことが不變の眞理なのであろう。しかしそのためここに樣々の歷史解釋がなされ得るという可能性も出てくる。それだからウォルシュのようにその點に（一）

個人的好嫌、(二)偏見または歴史家の屬する特定グループに結びつく假定的見解、(三)(歴史解釋の理論根據の不一致、(四)道德的信念または世界觀の相違、などを擧げて、結局「歴史は radically and viciously に主觀的である」[14]と極めつけることも理由のないことではない。事實、歴史が書きかえられるということはいつの時代にも云われている。

トーマスによつて眞理とは「對象と知性との合致」adaequatio rei et intellectus であるといわれるが、歴史は現存していない事實對象をそれの間接經驗または主觀化された記錄を通じて現在再構成したものであるから、この意味での adaequatio は得られない。結局歴史的眞理とは直接對象に卽して眞僞を吟味しようがないので、現在の構成原理の中に求められなければならない。そうすればその構成原理さえ論理的にまちがつていなければ、それに應じて歴史的眞理のうちに多樣性を許すことにもなる。ギボンの「ローマ史」もモンゼンの「ローマ史」も、ランケの「ローマ教皇史」もパスターの「ローマ教皇史」も、觀點の違いだけがあつて、その間に眞僞の差違はないということになる——ここで「歴史的相對主義」historical relativism に陷る。またその歴史解釋に主觀以上のものがないとすれば、結局客觀的な歴史的眞理というものはないのではないかということもいえる——これが「歴史的懷疑主義」historical scepticism の根據。この「相對主義」と「懷疑主義」は確かに歴史の袋小路であつて、いわゆる歴史主義の危機というものが專らこの點にかかつていることはマイネツケやホイッシ K. Heussi 等が認めるとおりである。ホイッシは尙これに「耽美主義」Aesthetizismus ——いわゆる歴史のディレッタンティズム——を加えて三つをあげているが[15]、ウォルシュはまず historical scepticism と perspective theory の二つをあげている。

ではこれ以外に客觀的な過去の認識に達する途がないのであろうか。これは非常に serious な問題で、歴史の科學性

の可否ということはここにかかつているともいえる。ここで一つの解決法がある。例えばウォルシュの場合である。彼はこの第二の perspective theory から解決の緒を探る。彼によればこれを通じて弱い意味で客觀性を得られる。即ち互いに歴史家の見解が矛盾 contradictionary してはならず、補足的 complementary であればよいというのである。[16] 即ちどこまでも認識構造の方から規定して行こうとするのである。いろいろの歴史解釋の間に論理的矛盾を排除して行けば共通の客觀的認識に達しうるという意味であろう。これは極めて心細いといえばいえるが客觀的普遍的認識への途は拓ける。彼はまた強い意味で歴史の客觀性に達しうるといつて第三の途を提示する。即ち原則的にその主觀的觀點が普遍的受容を獲得するに至る發展可能性が排除されないから、結局この上に立つて「客觀的な歴史意識」が可能であるという。これを The theory of an objective historical consciousness[17] といつて、ウォルシュ自身この第三の立場に立つものと見られる。彼によれば人間本性の可能性の眞の認識に基く「歴史的意識一般」historical consciousness in general の發展が求められるというアプリオリな前提をもつて、そこから歴史認識の普遍的眞理に達する途を見出しうると考えるのである。だから結局彼によれば歴史家は夫々の狀況の下に how people *do* behave の規準的な認識を得るだけでなく、how people *ought to* behave の規準的知識も得なければならぬ、ということになる。[18] これは要するに歴史に Sollen を求めることである。マイネッケが相對主義と懷疑主義の打開に惱みあぐんだあげく、それを「良心」Gewissen によつて克服しえたとする理由[19]もこれに關聯させてみれば肯けないこともない。しかしこれは歴史主義の科學的解決でないことはいうまでもない。しかしとにかくこうなればイデアリストの立場を大きく容認したことになる。ウォルシュはこの點で實證主義の立場を離れてコリングウッド R. G. Collingwood に同調する[20]（コリングウッドはク

ローチェの影響から觀念論を強く受けている)。ウォルシュのように本來の歴史にアプリオリを要請しSollenを認めて歴史にIdealismusを導入することは非常に危險であるが、しかしまたそれは歴史の普遍的な客觀的認識を保證する一つの方法ではある。勿論こういう「歴史的意識一般」――いかにもカント的な――というものに到達することは容易なことではない。すでにカント自身が述懐したようにそれは困難な長い試煉が要る。ウォルシュもそれを"a pious aspiration"だと云つている。[21] 確かにカントは人類教化の完成という歴史の發展目的に人類的な願望をかけていた。しかし勿論これ自體は科學ではない。人間の知的能力の完全な發展可能性に對する期待であり、強いて云えば信仰である。カント主義の歴史哲學が一つのFortschrittsglaubeであることは誰の眼にも明らかである。とにかく歴史の相對主義と懐疑主義を克服するのにこういう方向にもつて行かなければならない理由は認めなければならない。

しかしそうだからといつて、從來のイデアリストの主張をそのまま容認するというのではない。歴史の主體を人間の精神行爲と規定する點ではイデアリストは確かに直截で正しいが、この「精神」をかつてヘーゲルのように「理性」とのみ規定したこと、そして歴史を普遍的な世界精神の「意識」過程とのみ見たことは觀念論の獨斷であり行き過ぎである。これはもつと廣く解されなければならない。

そこでディルタイのように精神にdenken, fühlen, wollenを含めて一個の具體人(全人)として考え、それによつて過去と現在の間に直接經驗を通じて理解されるものを「客觀精神」と考えたような考え方、またリッカートが精神を感覺を通じないで理解だけされるものと規定して、超個人的über-individuellな内容をもち間主觀的inter-subjektivな作用をもつところの「意味形象」Sinngebildeというようなものを考えて行つたことを改めて考えてみなければなら

ない。リッカートはこの「意味形象」というものが感覺を通ずる必要なく、また意識如何にかかわらず、各人に共通のものとして傳達され得ると考え、これが過去から現在に傳えられる「客觀精神」であると云つた。歷史におけるZeit-geistとかTendenzとかいうものは皆これであつて、この意味形象がそれぞれの間に次第に擴がつて遂に普遍的認識に達しうると考えたわけである。この近代歷史存在論の意圖するところが新カント派の試みる方法論よりする歷史學の基礎づけの弱點を矯正し、また精神の解釋を擴げてヘーゲリアニズムの唯心論を是正しながら、どこまでも歷史の精神存在を押して行つた功績は認めなければならない。この問題については稿を改めなければならないが、何れにせよ、歷史的事實の客觀的認識ということは、行爲事實そのものに認識が照應するという仕方では得られないので、結局は精神實在の前提の上に論理構造または意味關聯の方にのみ眞理性の規準を求めなければならないというところに困難があるのである。したがつてそれの科學性ということは自然科學的な科學性というより一個の精神科學的なもので、その點で歷史學はむしろ哲學的な科學性に近いものである。もしその哲學的科學性とか精神科學ということが成り立たないとすれば、歷史學の科學性ということもそれと共に崩れるのは致し方ない。

三

しかしまた元に戻つて、ポッパーの分析が半面歷史主義に科學性の積極的な面、卽ちPro-Naturalistic Claimも認めていることを見落してはならない。[22] これによつて「歷史學」の方法は一種の社會科學的方法をそなえて科學的に補强されると思う。しかし勿論この場合ポッパーによつて明らかに指摘されているように、Historicismの概念はどこまで

も social engineering の面に限定されているのである。これはいわば歴史の科學性の限界點であろう。その主要點をあげてみれば、

（一）前述の Anti-N. Claim の（五）に對して、嚴密ではないが豫言ができる。なぜなら（八）の qualitative term が、可能的なものから現實的なものへ——アリストテレス・トーマスのいう potentia から actus へ——の顯現過程において、必然的に或る意味の充實と包括を供しうるので、この點に基いて short-term prediction はできないまでも、long-term 或いは long-scale forecast ならできるわけである。勿論この豫言は正確な時間空間點において指摘できないから本來の「豫言」としての historical prophecy とは區別されなければならない。[23] どこまでもこれは technological prediction たるのみである。

（二）前述の Anti-N. C. の（二）に對して、社會科學の方法は政治的・社會的現象の統計的記錄を供しうるから、これが或る程度の社會科學的實驗の基礎になる。これによって前述の forecast を立證したり反駁したりすることができる。

（三）歴史社會を動かす一つの社會的な力（精神的・物質的）のメカニズムを分析できる social dynamics をもつている。これによって歴史の原因ということを universal driving forces として捉えまた社會變化の法則も見出すことができる。

（四）前述の Anti-N. C. の（一）に對して、全時代の平面的な uniformity は得られないまでも、各時代に適應する限りでの general historical law なら引出せる。

これによつて彼のようなポジティヴィストから見て貧困といわれながらも、歴史主義の方法が social engineering として限定される限りではかなりの科學性を獲得しうることは否めない。これによつて歴史學プロパーがいわば方法的武器を強化しうることは認めなければならない。現代の歴史家はこの點の認容をいさぎよくすることによつて、十九世紀歴史學の科學的要求を一歩前進せしめなければならない。この社會科學の方法的適用ということは歴史を破壞する疑懼より反つて僞歴史を破壞する功用性の方が大きいと思う。なぜならポッパーのいう Pro-Naturalistic Claim から主要點を要約してみれば、

（一）自然法則とはちがうが、一つの歴史的社會法則というものは引出しうる。

（二）故はこの法則性の上に立つて歴史の豫言可能の限界が擴がつた。

この二點によつて科學的條件は或る程度充たされたことになる。しかし勿論この法則というものがメカニズムに陷ることは極力避けなければならない。それは多く物理的な自然法則に依存しながらも人間の主體的自由においていわば人間化された自然の法則でなければならない。現代のマルキシズムにおいてはこの點が充分に留意されて、素朴な唯物論は克服されている。マイネッケ、マイヤー Eduard Meyer 等のドイツ歴史主義者が歴史に自然法則の導入を拒否するあまり、社會法則までもこれと同一視したことは誤りで、自ら歴史に科學性を放棄したことに他ならなかつた。またヴィンデルバントが Was immer ist から「一般法則學」Nomothetische Methode を引出し、Was einnal war から「特殊記述學」Idiographische Methode を引出して、前者を自然科學、後者を歴史學の方法とした區分の仕方は、爾來半世紀の社會科學的方法の發達によつても或る點まで崩されるものと思う。

それから豫言の問題であるが、コント等が歴史科學に要求した voir pour prévoir —— voir pour voir ではなく——ということはこの限りで充たされたわけである。しかしまた就中、社會科學においては pre-diction と retro-diction とが併行するという命題が立てられから[24]（ウォルシュ、ライル G. Ryle）、歴史の場合特に rerodiction を援用することによつて、一つの法則性の明證が得られれば過去に遡つてもその條件の下にその結果が so-and-so に起り得たはずであるという豫測を可能にする。したがつて過去において從來偶然的（自由契機）、一度限り的と說明されていた事實が、この法則性の適用によつて實は自然必然的・反覆的だつたことが判明する。つまりこの方法は pseudo-historical fact を排除するのに役立つわけである。これによつて、英雄主義、心理主義で歴史的動機をとらえる歴史家がしばしば「歴史」ではなく「物語り」を書いているにすぎないことが明らかにされよう。だから結局この方法は眞の歴史性（究局的な意味での一回限り性）を反つていよいよ尖鋭にあらわすことになると思う。また Pro-N. C. の（三）における social dynamics の援用においても、それは歴史的原因の一切の動力化という危險に導くよりも、むしろより根本的な歴史的力（たとえば宗教的・倫理的觀念）の認識を反つて要求せしめるものであろう。

尙、「發展」という概念を歴史概念の中に含ませるかどうかが問題であるが、これは歴史分析論の最大の難問である。この發展概念はベルンハイムのように genetisch なものと解するよりも dialektisch なものと解すべきだと思う。結局それはヘーゲル・マルクス以來の辨證法理論を一つの科學的方法として認めるか否かということになるわけだが、この點についてポッパーの立場は否定的である。しかし筆者はポッパーが Idealism をたゞ一概に Utopianism として片

付け、ヘーゲル・マルクスの史的辨證法理論を僞科學乃至 pseudo-economics と見る意見には贊同できない。[25] このような結論は普遍概念の實在を認めないラディカルなノミナリストとして當然といえばいえよう。しかしそれならば歴史の實體は何であるかと問うてみよう。彼の答えは、始めもなく終りもない進歩も意味もないたゞあらゆる種類の人間生活の不定數の堆積だけだという。それは要するに國際惡——人類惡とはいわない——と殺戮を繰り返す power-politics 以外の何ものでもないと云いきる。したがつて歴史には何等の意味もなく目的もなく、さらには「人類史」history of mankind という概念すらあり得ずとされる。彼によれば、從來歴史に進歩の指標を與えた形而上學・道德的理念或いは宗教的世界觀というものは、人々が知性に對する確信と行動に對する責任を失つたところになされた一つの「賭」であるにすぎないと見られる。この非合理的なものへの賭が歴史に意味——單なる名辭——を與え、いわゆる歴史哲學の理念なる幻影を形成したのであるという。Dialectics はその進歩主義の代辯であるにすぎない。從つて Idealism は Utopianism に他ならないというわけである。[26] しかしそれならば我々が知性に對する確信を有し、觀念の幻影を排して事物實體に卽した正確な知識を獲得するのに一つの歴史——知性の進歩という歴史——がなかつたであろうか。またポッパーは彼のいう pragmatic rationalism——idealistic rationalism ではない——を徹底させることによつて「我々は我々の運命の maker になる」ことができるというが、それではこの合理主義の徹底的な展開を保證するものは何であろうか。彼はそれは「その上に自由と進歩が基くデモクラティックな體制を擁護しそれを伸長させることにおいて」[27] と答える。そしてまた彼の前述の歴史の實體と目される power-politics の無限の衝突を克服するものが歸するところこのような理念にあるとすれば、彼の Historicism の分析が、知性の本質を破壞するような人間性の自己疎外をもたら

す資本主義社會の矛盾――それは彼の抱いているデモクラシイの理想を根柢からくつがえす――に對する分折が果してなされての上の結論であろうかと疑問を抱かざるをえない。問題は主知主義を支える社會構造にあるのである。彼が現代のデモクラティックな體制の伸長を阻むものを單に觀念の幻影に踊る power-politics と見ているとすれば、それは皮相な政治的觀測でこそあれ、透徹した社會科學的分析の結果であるとはいい難いのではないか。結局この問題は彼が先きの辨證法理論を簡單に Utopianism として拒否したところから發すると見るのは筆者一人の讀みちがいであろうか。[28]

ともあれ、この問題は別にしても、ここにポッパーの指摘した Historicism の科學性ということは積極的に評價さるべきだと思う。しかし勿論この場合の社會法則といい、prediction, retrodiction といい、何れも無條件的に使えるものでないことは既に述べた通りである。それはどこまでも條件付きのものであつて、歴史科學を一個の social engineering とした限りでの technological な意味でしか使えないものである。いわば "Piece-meal method" でしかない。[29] 他の自然諸科學と同種の科學性を歴史學について云おうとすれば、この上においてしかいい得ない。それを超えしむるものが Holism である。しかし「歴史」という概念そのものをもつと充足的な意味で規定すれば、どうしても全體としての歴史 (Holism) でなければならない。そうするとその決定的なモメントは科學の外に出てしまう。それは精神の主體的自由において一切の自然法則・社會法則の外、したがつて自然的豫言不能のところにあるということになる。これを何らかの意味で決定されたもの、或いは豫知されうるものとすることはもはや我々の知性の限界の内にない。もはやそれは經驗科學の問題ではない。全歴史の始源と終局、歴史の全體の意味については、我々はそれを Meta-historia

に委ねるより致し方ない。我々のもちうる歴史の意味はどこまでも我々の實存の限界狀況の上に立つた相對的な全體像（歴史の始源と目標）より得られたものにすぎない。しかもこの全體像は絶えず打破される。それに從つて意味もまた更新される。絶對的な歴史の意味は絶對的な歴史の全體を有するもののみが知りうる。それはもはや歴史を超えた永遠存在のみが所有するところであろう。或いは神的照明を直接受けた豫言者 Prophet のみ覗見することが許されるものであろう。要するにそれは「歴史の神學」の問題であつて「歴史の哲學」の問題ではない。しかしまた歴史という概念は最も充足的・根源的には「存在と時間」の構造自體に求められ、永遠と瞬間、或いは永遠と現在の間に成り立つものであるから、これを實證主義者のように單に社會科學の一方法論というものにのみ解消しきれるものではない。したがつてポッパーのいうような歴史主義、即ち社會科學の methodology としての歴史科學と、歴史の根源であると同時に超科學のメタ・ヒストリアとの領域を劃定することがまず前提とされなければならない。そうすればその意味で「歴史形而上學」はやはり一つの存在理由をもつているわけである。この點でイタリアのパドヴァーニ U. A. Padovani のようなスコラ的立場に立つ者がまづ「歴史」の概念を「經驗的歴史」storia empirica と「充足的歴史」storia integrale とに分けたことは賢明である。[30] なぜならこの區分によつて前者に歴史の哲學乃至科學を、後者に歴史の神學を歸屬せしめることができるから、ここでいう科學としての歴史を前者に限り、後者において本來の完全な歴史概念が得られるということになるので、問題の難點はその出發において回避することができるからである。

（一九五五・二・四）

註

（1）ロータッカーやトレルチの造詣深い精神史的研究がよくそれを説明している。E. Rothacker, Einleitung in die Geisteswissenschaften, Tübingen, 1930. E. Troeltsch, Der Historismus und seine Probleme, Tübingen, 1922.

（2）ランケ及びランケ派（ドイツ歴史派）のこの問題については拙稿「ランケ史學の根抵に對する歴史哲學的一考察」（史學、二十五ノ三）を參照されたい。何、ベックルの自然主義的方法に反對したのは J. G. Droysen である。ランプレヒトとの方法論爭に加わつた歴史派の人たちは F. Meinecke, F. Rachfahl, M. Lenz, G. von Below, H. Finke, O. Hintze, H. Oncken, W. Dilthey, 他に哲學陣營からは H. Rickert, 直接この論爭には加わらぬが E. Meyer.

（3）そのうち主だつたものを擧げてみれば、

Karl R. Popper, The Poverty of Historicism, in "Economica" (May 1944, Aug. 1944 and May 1945): The Open Society and its Enemies, 2 vols, London, 1945.

P. Gardiner, The Nature of Historical Explanation, Oxford, 1952.

Morris R. Cohen, The Meaning of Human History, The Open Court (Illinois), 1947.

R. G Collingwood, The Idea of History, Oxford, 1946.

W. H. Walsh, An Introduction to Philosophy of History, London, 1951.

G. J. Renier, History; its Purpose and Method, London, 1950.

C. G. Hempel, The Function of General Laws in History, in "Reading in Philosophical Analysis", ed. Feigl and Sellars, 1949.

M. White, Historical Explanation, in "Mind", 1943.

（4）ポッパーがここで使つている「歴史主義」Historicism という概念は、マイネッケ等のいうドイツ「歴史主義」Historismus とは大分ちがう概念である。ポッパーにおいては、或る場合にはプラトニズムの觀念論の近代的歴史化即ちヘーゲル・マルクス

の歴史哲學を總稱して云つているので（Open Scoiety and its Enemies）、この場合には從來の「歴史哲學」The philosophy of historiy という概念と置きかえても差支えないのであるが、他の場合には「社會科學の方法論の一つ」として規定されている（Poverty of Historicism）。ここでは後者の場合の社會科學の歴史的方法という意味に解すれば、彼の說くところは了解される。したがつてここに歴史學の科學的方法ということが問題になつてくる。しかし何れにせよ「歴史主義」という概念をこのような二樣の意味に使うことは決して當を得たものとは思えない。兩著の間に時には矛盾すらある。しかしまた「歴史主義」という概念がいかに明確な定義をしにくいものであるかということはひとりホイッシだけが感じているわけでもなかろうから（K. Heussi, Die Krisis des Historismus, Tübingen, 1932《Der Begriff des Historismus》參照）、ポッパーのこれも試案の一つとしての意義は充分にある。

（5）Popper, Poverty of Historicism, I（"Economica" May 1944）.

（6）このことは既に早くから歴史家の側からも意識されていて、ランケも「この花がリンネのどの類、オーケンのどの種に屬すかということを考えるのではなく、この花をこの花のために――個別を個別のために――見て喜べ」と云つて、歴史の方法をどこまでも個體主義として主張する（Ueber d. Epochen d. neu. Gesch., S. 4）。ドロイゼンやリッカート等も歴史の方法を generalisieren に對して individualisieren として主張する。しかし問題はこの個體主義（Individualisierung）をいかにして科學的方法とするかである。

（7）しかしこの intrinsic novelty ということは、法則は勿論だが結局は「類型」までも超出すると考えるべきであろう。生物學的な發生論に立つ立場は何れも歴史に個の發生・死滅、類の生命持續という生物原理に則つて民族・文化の歴史に一種の成長段階的な類型化 typisieren を行う。例えばランプレヒトの Geistiger Diapason 或いはシュペングラーの文化形態學 Kulturmorphologie がそうである。從つてこの typisieren は前述の generalisieren に準ずるものと考えられる。だからここでもまた individualisieren に通ずる intrinsic novelty がいかにして typisieren, generalisieren を超えて科學の方法とされうるか、という問題である。

(8) この Holism は結局形而上學の對象であろう。ランケのような歴史家は、歴史の對象が終始「全體」das Ganze にあるということを主張しつゞけている。しかしそれが歴史をますます經驗科學から遠ざけるということは意識していなかつた。それだけ彼の形而上學に對する依存が深かつたともいえよう。歴史を經驗科學的なものにするか形而上學的なものにするかは、この Holism を對象に引き入れるか否かにかゝつているといえよう。

(9) これもヘルダーの sympathisieren 以來、フンボルト、ランケ、更にディルタイによつて歴史の固有の認識とされて來た。しかし經驗科學の側からはこれが科學的認識とされぬことは當然であろう。

(10) 明瞭にポッパーは「唯名論」Nominalism に對して「實念論」Realism という意味で云つているのであるが、リアリズムという概念が寫實主義・現實主義という概念と混同されるのをおそれて、その意味内容をとつて Essentialism といつているのである。

(11) この歴史の一回限り性ということが自然の反覆性に對して云われて來た由來は極めて古くまた深い。理論的にはヘルダー、シェリングから始まりドロイゼン、ヴィンデルバント、リッカートに及ぶ一連の系譜をもつているが、更にこれは歴史存在の根源に觸れるものである。その意味でギリシャの無限回歸説をくつがえして歴史を一回限り的のものとしたキリスト教——それの理論化としてのアウグスティヌス——は眞の歴史概念の創成者であるともいえる。從つて歴史性の尖端はいつでも何等かの意味變容を伴いながらここから發し、またここに歸る。この點でレーヴィットの鋭い洞察は示唆に富んでいる (K. Löwith, Meaning in History : The Theological Implication of the Phiosophy of History, Chicago, 1949.)

(12) W. H. Walsh, An Introduction to Philosophy of History, p. 47.

(13) Ibid., p. 30.

(14) Ibid., p. 99—100.

(15) Karl Heussi, Die Krisis des Historismus, S. 7

これは歴史の觀照主義に通ずる。Antiquarismus と云つてもいいと思う。ブルクハルトなどはこの好例であろう。クローチェがランケとブルクハルトをあげて「歴史的問題なき歴史」として棚上げしているのは明瞭にこれの故である (B. Croce, Die

Geschichte als Gedanke u. als Tat, S. 135)°

(16) Walsh, Ibid., p. 108—109.

(17) Ibid., p. 116.

(18) Ibid., p. 118.

(19) とにかくマイネッケの歴史主義は、「確固たる倫理的基礎なき歴史把握は波のたわむれの如きものになる」、「良心の聲において あらゆる流動的・相對的なものが突如として形式上確固たる絶對的なものとなる」、「歴史のあらゆる永遠價値は結局行爲する人間の良心の決斷に由來する」という結論を以て、その歴史主義概念の不明確なまま、一つの倫理主義をかかげて終っている。
Fr. Meinecke, Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, Stuttgart, 1951, S. 20—22.

(20) R. G. Collingwood, The Idea of History.

(21) Walsh, Ibid., p. 118.

(22) Popper, Poverty of Historicism, I and II.

(23) Ibid., III ("Economica" May 1945).

(24) Walsh, Ibid., p. 41.
G. Ryle, The Concept of Mind.

(25) Popper, Poverty of H. II. The Open Society and its Enemies, vol. II.
しかし純然たる經驗科學であるというのではない。史的辯證法理論のうちにあるメタ・サイエンス的性格、したがってビゴーのいうマルキシズムの méta-économique 的性格は勿論認める (P. Bigo, Marxisme et Humanisme, Paris, 1953 參照)。しかしそれを單に非科學・pseudo-economics という意見には賛成できない。この點についてはスウィージイの要を得た論駁 (P. M. Sweezy, The Present as History, New York, 1953, p. 330) に筆者も賛成である。

(26) Popper, Open Society, II, Conclusion: Has History any meaning ?

(27) Ibid., p. 280.

(28) 前述のスウィージイの反論を參照されたい（註25）。

(29) Popper, Poverty, II.

(30) U. A. Padovani, Filosofia e Teologia della Storia, Morcelliana, Brescia, 1953, p. 77.《Sul concetto di obbiettivita della storia: storia empirica e storia integrale》パドヴァーニは現代イタリアにおける歴史哲學の俊才であるが、そのネオ・トミズム的立場よりする歴史の形而上學は、近代思想の陷る獨斷化をよく抑止している。尙他に I. di Napoli, C. Ottaviano, C. Boyer, N. Petruzzellis, V. Rovighi, S. Vismara, F. Olgiati 等の立場も何れもこの線を保つている。從つて同じ歴史の科學性という問題をめぐりながらもイタリアの歴史哲學界はちがつた問題性の次元に立つているので、別の角度から扱わなければならない。興味ある次の諸論考については別の機會に論じたい。
C. Ottaviano, Storia, filosofia della storia, scienza della storia: M. Casotti, La storia non e scienza: Olgiati, Filosofia storia della filosofia, storia: M. Crovini, Scienza e storia: G. Ruotolo, Il problema scientifico della storia: G. Ceriani, La storia e la enciclopedia della scienze. etc. (Padovani, ibid., p.11).